温 故 知 新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（53）　平成 14 年 8 月 15 日

農学・本草学シリーズ③

貝原益軒の『大和本草』（499.9/ｶｲ）

日本の本草学の発展は、江戸時代前期の儒学者・庶民教育家の貝原益軒（寛永 7 (1630)年～正徳 4 (1714)年）が記した『大和本草』により始まると言われます。益軒は幼年期に病弱であり、父寛斎の薬性に関する指導を受けながら好んで本草学の本を読みふけりました。また代表的な和算書『塵劫記』を幼少時に理解するほど頭脳明晰でした。早くから軍記物・節用集などの和書や物理学の本をも愛読したため、後に儒教を学んでも儒教的思考論理だけに束縛されることはありませんでした。青年期になると、江戸勤務の父を助け江戸に上り、この際に幕府儒官林鵞峯を訪ね儒学に進みました。その後、筑前国福岡藩士である彼は、７年間に及ぶ藩費による京都留学を認められ、松永尺五・山崎闇斎・木下順庵を訪ね、特に順庵とは相互に往来をしました。また本草学者の向井元升や黒川道祐らとも交遊しました。彼はこの留学時代に京都に勃興しつつあった経験・実証主義的な学問姿勢を体得しました。

『大和本草』は、16 巻附録２巻の本編 18 巻と、諸品図２巻３冊からなります。宝永５ (1708)年に成稿し、翌６年に刊行されました。但し、諸品図は正徳５ (1715)に刊行されました。収録されている自然物は『本草綱目』収録のもの 772 種、その他の本草書収録のもの 203 種、日本固有種 358 種、海外産 29 種、計 1362 種です。なお、日本固有種には和名を使い、解説には名称・来歴・形状・効用などについて和文で書かれています。『大和本草』は薬効についてもふれてもいますが、薬物学というより博物誌にふさわしい内容として配列されています。

『大和本草』は、「本草綱目に品類を分つに疑う可き事多し」（巻１）とあるように、李時珍の『本草綱目』に対する批判的な研究と、貝原益軒自身による実際の諸品の調査研究によりできています。彼の執筆の意図は、「本草学は以つて民生日用に切なりとなす」（自序）にあるように、一般庶民の生活に有効であるところにあり、このために諸品の方言名までもが記しています。これは、諸品の名称が日本各地で異なるため、植物等の「もの」の認識を難しくしているとし、その「もの」の形状を考察・認識するべきだとし、その過程で方言名までも調査するべきであるとしました。このため益軒の調査・研究は、江戸期の方言研究の源流ともなりました。益軒はこの書で、伝統的な権威にとらわれることなく、自らの観察調査に基づき、自然物を認識する態度を構築し、中国渡来の学問から自立させ、日本の本草学の確立を促しました。日本の本草学の確立は、多発する江戸期の飢饉に対する備えを説く救荒書の成立の重要な要因となります。

【参考文献】

『江戸の博物学者たち』(499.9/9)
『薬草博物誌』(499.8/38)